福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

教職大学院Newsletter 102

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻教職大学院Newsletter編集委員会 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/10365

教職大学院 Newsletter No.102

福井大学大学院　教育学研究科　教職開発専攻　since2008.4　2017.10.7

校長としてのマネジメント

福井市明新小学校長　北川　裕之

新指導要領ではカリキュラムマネジメントがキーワードの一つとなっているが、カリキュラムに限らず学校は、校種、学校規模、地域性、歴史伝統など、条件が異なるため、学校経営を考える場合、一般解ではなくその学校に合う特殊解を求めなければならない場合が多い。このため学校は、管理職の経営によって大きく変わるものであり、その重責を担ってマネジメントすることが私にとっては楽しい。

現在、県内で最大の児童数である本校では、日々いろいろなことが起こるが、職員の努力により学力や生徒指導、危機管理などの点では十分対応ができており、成果を残していると考えている。

本校で勤務する学校改革マネジメントコースの院生とは、学校の様々な課題について話し合っている。また、ストレートマスターコースの院生には、本校の教員の一人として、積極的に授業その他の業務への取り組みを求め、指導力の向上に励んでもらっている。そんな中で、現在の私が考える課題は２つある。これは、本校に限った課題ではない。

１つは、若手教員の指導力向上である。福井県の公立学校が大量退職、大量採用の時代を迎えていることにより、本校にも講師経験０～１年の新採用が毎年赴任してくるようになってきた。このため、教諭の平均年齢が４０歳を下回る若手の多い小学校となっている。私の新採用時代のように、“まだ若いから”とあたたかく見守ってくれる保護者は少なく、ベテランと同等の質の教育を若手教員も求められている。本人のためにも、指導力向上に学校全体で取り組んでいる。

もう１つは、国全体で議論されるようになってきた「働き方改革」についてである。現在の学校は、いじめ・不登校への対応、過大な期待や要望をもつ保護者への対応、新学習指導要領への対応など教員が多忙化する要因には事欠かない。本校は、ほとんどの学級人数が３０人以上で、各学年４～５学級であるため、学年あるいは職員全体で情報を共有したり、意見交換したりするのにも他の学校以上に時間はかかる。「働き方改革」については、福井市教育委員会や校長会でも積極的に議論されるようになってきた。行政が改革すべきこと、学校が改革すべきことを話し合い、実現可能なことをスピーディーに実行に移し始めている。

同時に、各教員にも求めなければならないことがあるとの思いを私は強くしている。それは、時間コストを意識した仕事をすることである。タイムマネジメント力を高めなければならない。教員は、超過勤務に対する時間管理をする必要がない（超過勤務手当が出ない）特殊な職業であるがゆえに長時間勤務に鈍感な文化がある。また、教員は独創性を大切にすることが多く、それぞれが

目次

巻頭言 （1，2）
スタッフ紹介 （2，3）
院生紹介 （3～13）
インターンシップ/週間カンファレンス報告 （13～17）
ラウンドテーブルに参加して （17～19）
教職大学院秋期説明会案内 （20）
スケジュール・編集後記 （20）

工夫した指導をするために、他の教員の作った資料等の財産をあまり積極的に活用しようとしない。自分がやりたいことは自分で作り、自分が納得するまで時間を度外視してやろうとする傾向にあるのである。また、教員の自主的な研修組織である小教研や中教研、各教科独自の研究会の取り組みも同様で、事務局が熱心であればあるほど、会議の回数が増え、事業が増える傾向にある。こうしたところにも切り込んでいく必要を校長会で訴えている。

教員を目指す未来の若者たちのために、管理職がすべきことを精一杯取り組んでいきたい。

スタッフ紹介

西賀　香織　さいが　かおり

はじめまして。5月1日より福井大学教職大学院の事務員をさせていただくことになりました、西賀　香織（さいが　かおり）と申します。

学生として大学生活は送ったことがあるものの、大学事務や教職に関わるお仕事をさせていただくのは初めてですので、まず環境、それと一大組織の事務構成や、職員の多さに驚き、先生方が教育に対して表から裏からこれほど真摯に取り組んでらっしゃるのかと日々驚いています。微力ながら、事務員として皆様のサポートが出来ればと思いますのでよろしくお願いします。

さて、私は夫の転勤で去年の10月に奈良県から福井市へ引っ越してきました。

今までずっと奈良住まいでしたので、新天地福井に馴染めるか不安半分期待半分でこちらにきました。まだ一年も過ごせていないのですが、福井市と奈良を比べて個人的に感じたことがたくさんあります。

まず、基本的なところでは食べ物がおいしい、地産野菜の方が安い、お惣菜販売の種類が豊富、水ようかんが常に陳列されている、お好み・たこ焼きソースの種類が少ないなど、主婦として気になる食文化のちょっとした違いや、サンルームや除湿器の普及度、冬物衣料の防寒面での安心感、ガス代が高い、テレビ番組（CATV）やCMの地域密着度の高さといった生活範囲でのこと、電車の乗降車の仕方に戸惑う、改札機がない、車が多い、ガソリン高い、道路が広いなど、交通面での発見。特に電車にアテンダントさんがついているという状況が今までなかったのでちょっと驚きました。路面電車は奈良にはなかったので、小旅行がてら一度乗ってみたいなと思っています。

それから、真面目、親切な人が多く、「ありがとう」や「いいよ」という言葉の使い方が優しいといった人に対しての中で、特に言葉の違いが面白いです。
就職する前に3カ月間ほど学校に通い、地元の20代～60代までの方々とみっちり同じ部屋で過ごしていたのですが、さすがに私の方言（関西弁）に変化が出てきました。

まずは不思議と関東方面で多用されているような「～じゃん」「～だよね」のような言葉や発音が多くなりました。その後ちょっとずつこちらのアクセントに寄ってきている状態になり、最終的に発音があやふやな関西弁に変化していました。

残念ながら3カ月だけだったので、今は元に戻った感じがしますが、アクセントの癖が強い方と電話した際にはやっぱりちょっと今までと違う発音になります。また、福井で知り合った方とメールのやりとりをすると馴染みのない単語があったり、意味の取り違えがあったりすることもあり、言葉の違いの面白さは続いております。

最後に、福井暮らし最大の難関についてです。引っ越すにあたり、福井…というよりも北陸地方で一番気になるのが雪の問題です。奈良でも一部の地域では雪は降りますし、市内でも年に１度位は１０ｃｍ程度積もることがあったりします。私は、冬はスタッドレスタイヤに変えないと心配な地域で育ちましたのでまだ雪は身近ではありましたが、やはり不安がありました。

こちらへ来てまず目についたのが縦型信号。これを見てより雪への恐怖が倍増しました。怯えながらもとりあえず一冬越した感想です。一時間の雪の降り方が違う、休日でも雪にはしゃぐ子供が少なく雪だるまがある家が少ない、消雪パイプの水の勢いが場所によって強くて驚き、毎回の車の雪下ろしが大変、雪かきも大変、車を購入したら有無を言わさず寒冷地仕様になるなど色々初めてなことだらけでした。特に冬の深夜の雷が怖かったです。慣れている方にこの話をするといつものことと一笑に付されるのですが、雪が降る前に雷が鳴るという知識がなかったので、とても勉強になりました。凍った道を軽く車で滑るという体験もし、一冬越してもう大丈夫と思っていたら、どうやら今年の冬はそれほど降っていないとのこと。福井の冬を語るにはまだまだ時間がかかりそうです。

福井の夏は未体験ですので、どれくらいの暑さなのかがわかりませんが、海のない県から来たものとしては一度位浜辺に行けたらと思っています。

まだまだ福井探索中ですので、おすすめスポットや食べ物、お店等ありましたら。また、逆に奈良に興味がある方、私の関西弁を完全な福井弁に変えさせたいという方、もちろんそれ以外でもお気軽にお声をかけていただけると嬉しいです。今後ともよろしくお願いいたします。

院生紹介

学校改革マネジメントコース１年/若狭町立上中中学校

竹村　嘉明　たけむら　よしあき

皆様はじめまして。今年度より、学校改革マネジメントコースの一員として学ばせていただくことになりました、竹村嘉明と申します。

私の初任校は、各学年１学級で規模的にそう大きくない小学校でした。教職員全員が一丸となって教育活動に取り組む学校で、管理職の先生方や先輩方にはいつも「学校はチームワークが大切である」と言われていました。以来、赴任した他の学校においても、学校全体が一つのチームになることを理想として、組織の中で自分自身が果たすべき役割について考えながら過ごしてきました。

私は現在、福井県嶺南地区のほぼ中央に位置する若狭町にある、上中中学校に勤務しております。昨年度の定期異動で本校に赴任し、生徒指導を担当して２年目を迎えました。本校は、全校生徒約２３０名の学校です。周りは水田や里山などの豊かな自然に囲まれ、生徒たちは小さなころから、地域の方々の温かい眼差しに包まれて育ってきています。環境の良さのおかげもあって、生徒指導上の大きな問題は少なく、生徒たちは落ち着いて学習や部活動に取り組むことができています。しかし、家庭学習が困難である生徒や、生活習慣の乱れから、遅刻しがち欠席しがちな生徒も少なくありません。これらの生徒は、家庭の環境が影響している者が多いと感じています。また、インターネット等の情報通信ネットワークの発展により、生徒はいつでもどこにいても世界中の人と繋がることができ、同時に危険とも隣り合わせの生活を送っています。以前は都会の学校の課題であったことが、今はどの学校にも当てはまる課題であるというのが現状であると言えます。

中学校では学年部会を中心に進める教育活動が多く、他学年のことに気が回らないこともしばしばです。それを解消するために、生徒に関する情報交換の機会を設ける、学年主任会を開く、運営委員会や職員会議で共通理解をするなどの方策がとられています。しかし、それらがうまく機能しないこともあります。「学年のことは学年内で解決しよう」という意識が強すぎることが原因の一つであると考えています。学習の面であれば教科部会の専門性を生かし、生徒指導上の問題であれば生徒指導部会との協働により問題を解決すべきであったと思います。

ただ、教職員の業務が多忙を極める中、情報を共有するために要する時間や心の余裕がないのが現状です。教職員全員が高い同僚性を発揮し、協働して学校の運営に参画できるよう、組織の改革を進める時期に来ていると感じています。この２年間、初心に帰って学び直し、運営や組織の観点から学校の課題を解決に導けるよう努力したいと思っております。どうぞ宜しくお願いいたします。

学校改革マネジメントコース１年/敦賀市立松陵中学校

竹中　由紀　たけなか　ゆき

はじめまして。この春、学校改革マネジメントコースに入学しました竹中由紀です。福井県の敦賀市にある松陵中学校に勤務しています。みなさんは、「敦賀」というと何が浮かびますか？先日京都での講演会で同じ質問をしたところ、「甲子園に出てくる敦賀気比高校」という答えしか返ってこず、少し寂しい思いをしました。松陵中学校のすぐそばには、日本三大松原の一つである「気比の松原」があります。白砂青松（はくさせいしょう）という言葉にぴったりな、白い砂浜、美しい松林、青い海は敦賀の自慢であり、夏にはたくさんの海水浴客が訪れます。ほかにも、敦賀のハワイと呼ばれる「水島（みずしま）」や、日本木造鳥居の中では３本の指に入る大鳥居を持ち、松尾芭蕉も訪れたという「気比神宮」があります。おいしい食べ物もたくさんありますので、ぜひ一度お越しくださいね。

さて、私はというと、平成とともに教員になり今年で教員生活２９年目です。昨年までずっと学級担任として子どもたちに一番近いところで関わってきました。日々成長し、変化する子どもたちとの毎日は、１日たりとも同じ日がなく、大変ではありますが、それが教員という仕事の魅力だと思っています。私には、大切にしていることが２つあります。１つめは、「授業で勝負！」です。私の専門は「数学」ですが、悲しいかな数学というと「嫌い」とか「大嫌い」という子どもが少なくありません。そこで私は毎年初めの授業で、子どもたちに「みんなが数学を少しでも好きになるように１年間頑張るね」と約束をします。そして毎時間５０分が私の勝負です。数学の苦手な子どもが、目をきらきらさせて「よっしゃ、わかった～できた～。俺、天才じゃねぇ？」なーんて言ってくれたときには、最高の達成感が得られるのです。２つめは、「自分が元気でなければ相手を元気にすることはできない！」です。先輩教師で、そこにいるだけで太陽のようにあたたかく、向日葵のように明るく、周りに元気をくれる人がいました。私もそんな存在になりたいとずっと思ってきました。今年、担任をはずれ学年主任という役目をいただきました。多忙化と言われる中、毎日本当に仕事に追われている学年の先生方と一緒に、少しでもみんなで楽しく元気に仕事ができるよう、まず自分が前向きでいるように心がけながら、自分に与えられた新たな役割に取り組んでいる今日この頃です。

そして、今年大学院で「学校マネジメント」について学ぶ機会をいただきました。今後の私の教員生活に活かせるように、多くの方々と出会い、語り合いながら、学びを深めていきたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

学校改革マネジメントコース１年/高浜町立高浜小学校

佐藤　公豊　さとう　まさよし

今年から「学校改革マネジメントコース」で学ばせていただいています、高浜小学校の佐藤公豊（さとうまさよし）です。どうぞよろしくお願いします。早速ですが、私の名前は高浜町にある青海神社の神主さんに付けてもらった名前だそうで、初対面の人にはまず読んでもらえません。小さい頃は、「こうほう」「きみとよ」等々、またかといった感じで名前を呼ばれるのが嫌で仕方がありませんでした。それが今では、電話で「まさよし」と呼ばれない内容については「おりません」「間違いです」と言って、各種セールスの電話を即座に断れる術となりました。ものは考えようだなと、年を重ねたおかげで考えられるようになってきました。

そんな私の住む高浜町は、福井県の西端にあります。その中でも私の住んでいる六路谷という集落は京都府舞鶴市との県境にあり、車で３分も行けば京都府になります。買い物や病院といった面から考えると生活

圏は舞鶴市にあり、高速道路の最寄りＩＣは舞鶴東ＩＣです。舞若道が全線開通するちょっと前までは、私の家からは県庁所在地である福井市へ行くよりも京都市へ行く方が断然早く着けた、そんな所に住んでいるのです。

今は、高浜町の西端から福井大学まで２時間で行けるようになりました。私が新採用時、研修を受けに福井市まで通っていたことから考えると夢のようです。ちなみに大学院からの帰り道、高速を使わずにずっと下道（８号線、２７号線）を通ると、今でもやはり３時間３０分以上はかかります。そんな所から、通うことになりました。ただ、これもこの年になって通うようになったことで２時間で行けるようになったのだと、時代の進化に改めて感謝しているところです。

さて、この３ヶ月、毎月のカンファレンスや６月のラウンドテーブルで、様々な刺激を受けながら過ごしてきました。特にラウンドテーブルでは、保幼小・小中の連携や取り組みについて等、私がテーマとしている「家庭・地域とつながる学校をめざして」に役立つヒントをたくさんいただききました。多くの先生方との出会いと得られる知識を生かして、この先、充実した２年間の学びを遂げたいと思っています。そして、この２年間の学びを振り返ったときに、本当によかったと思えるように取り組んでいきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

学校改革マネジメントコース１年/敦賀市立中央小学校

栗城　信市　くりき　しんいち

はじめまして。今年度４月に福井大学教職大学院学校改革マネジメントコースに入学しました栗城信市と申します。よろしくお願いいたします。

今年度４月は、私自身の人生にとって大きな出来事が重なりました。１つ目は、中学校から小学校への異動。二つ目は、教頭職を拝命したこと。そして３つ目は教職大学院へ入学したことです。私は、２６年間ずっと中学校で、英語科の教員として、担任として、また、学年主任として、子ども達に関わってきました。また、長い間ソフトテニス部の顧問として、子ども達とともに優勝を追いかけてきました。そんな私が、この春、初めて小学校で勤務することになりました。教頭職という大きな責任とともに。現在は、現任校で、あたたかい教職員のみなさまに包まれ、多忙なかでも、やりがいを持って職務に専念しています。当初は「中学校経験しかない自分が小学校でやっていけるだろうか」という不安もありましたが、今は、いつまでも不安や心配をもってやっていても仕方ないと割り切って、わからないことは他の先生方に聞きながら、また、先生方に協力いただきながら、仕事をしています。年度が始まって３ヵ月が経ち、やっと今、小学校という舞台に自分の脚で立っていることを実感しています。解決しなければならない課題は、いくつかありますが、今は、毎日新しい舞台で繰り広げられる大いなる物語に胸を膨らませています。

そして、３つ目の教職大学院への入学。教職大学院を志したのは、自分の教職における実践を見つめ直し、また大学院の学びを通して、今後の自分自身の教職における取組を確立したいという思いがあったから。さらには、たくさんの先生がたと意見を交え、その考えを知ることで「これからの学校」についての学びを深め、自己の学校運営に役立てたいと考えたからです。何度か合同カンファレンスやラウンドテーブルに参加させていただき、私が想像していた以上に多くの発見や気づきに出会うことができました。校種も立場も、出身も異なる先生方との話し合いは、私にとって驚きや感動の連続でした。先生方の測りしれない努力から生まれた数々の実践。そして挫折や失敗を乗り越えな

がら、創り上げた成果。「もっと聞いてみたい」という気持ちが心の奥からどんどんわき上がってくるのを感じました。今では、先生方から学ばせていただいたことを現場に取り入れたり、工夫して生かしたりしています。今後もこの貴重な機会を大切にし、自己の学びを深めていきたいと思います。

今まで述べてきました私自身における教員人生の大きな波。それらの大波が一度にやってきたことに大きな驚きを感じています。しかし、その一方で、私自身にとって、この１年が大きな意味を持つ１年になること、その中に教職大学院における学びがあることを、とても幸運なことだと感じています。「気持ちよく外の風に吹かれ、内の風を創る。」そんな１年にしていきたいと考えています。

学校改革マネジメントコース１年/福井市安居中学校

森阪　貴徳　もりさか たかのり

福井市安居中学校において、７年目を迎えている。安居中学校は福井県で３校目につくられた教科センター方式の学校であり、今年で開校６年目となる。７年目の自分は開校１年前に異動し、開校準備に携わった。そしてその１年後の開校からずっと安居中学校に在籍し、その変遷を見ることができた。非常に貴重な経験である。

現在の安居中学校の教職員を見渡すと、自分の次に長い教員は４年目と比較的在籍年数の若い職員構成である。このような環境の中、自分が安居中学校で果たせる役割は何なのか真剣に考えてみた。すでに異動されてしまったが、安居中学校開校に向けて、真剣に議論されていた先生方、開校に向けて様々なことに取り組み、現在の安居中学校の基礎を築かれた先生方。開校から始まったことを現状に合わせて見直し、軌道にのせることに尽力を尽くされた先生方。それぞれの先生方の姿を直接見みて、語り合った経験を今こそ大切にしなければならないと考えた。

今の自分にできること、自分だからこそできることは、開校に携わった先生方の想いをくみ取りながらも、新しく来られた先生方の新しい想いを融合させることでないかと考えている。現在、安居中学校は大きな転換期を迎えている。その大きな要因は少子化による生徒数の減少である。生徒数が減少するということは教職員の人数も減り、部活動など今まで開校より構成してきた様々な組織の見直しが必要となるということである。このような中、新しく来られた先生方の意見を尊重しながら、開校当初の理念が忘れ去られることのないようつないでいきたいと思う。

新学習指導要領や高校入試問題の変革など、私たちを取り巻く教育環境は日々変化している。今は教育界にとっても大きな転換期といえるかもしれない。そのような中、自分ができることは何なのかを考え、様々な先生方と理想の学校を語り合いながら、より良い安居中学校を目指して、協働して取り組んでいけたらと考えている。

学校改革マネジメントコース１年/小浜市立雲浜小学校

木橋　直樹　きばし　なおき

１年前に、雲浜小学校に戻ってきた。十数年ぶりである。

本校は、周り 3 方向を水に囲まれている。北は北川、南は南川、西は小浜湾に面している。東側は小浜城址がある。夕陽の時間には、それは素晴らしい景色が眺められる。

四季それぞれに、生き物と周りの自然環境が、子どもたちの健やかな成長を取り囲んでいる。「春は輝く南川、いさざはのぼるはつらつと。夏は海から川さして、さよりはあがるはるばると。秋は古城の空高く、とんびはあさるゆうゆうと。冬は青戸の内海に、かもめはあそぶのびのびと。」雲浜の四季が校歌に歌われている。

自然も少しずつ変化しながら、今の雲浜小学校をやさしく見ている。私も、時代の流れとともに変化してきただろうか。学校週 5 日制が始まり、総合的な学習が始まり、英語活動が始まり、学校のＩＣＴ化が進み、教員免許更新講習が始まり…、私はどう変わったのだろうか。教職員の多忙化解消が叫ばれている。実際のところその通りだと思う。なぜかひと昔ふた昔前の方が、余裕があった感じがする。それは私に若さがあったからだろうか。

業務改善を図り、よりよい学校づくりを進め、将来日本を背負って立つ児童生徒によりよい教育環境で学んでもらいたい。社会のニーズで時代の移り変わりに合わせ多様な力が求められるが、なんとかそれに迫る教育活動をしたい。

教職大学院で学ばせていただき、緊張感を持って人の話を聴いている。また、話を聴いていただいている。それがちょっとした気分転換にもなっているのが現状。

これからの 10 年間、私は、自分の生き方を考えながら、学校の在り方を考えていきたい。楽しい学校、みんなの願い、私の願いである。

学校改革マネジメントコース１年/浪花認定こども園

岩倉　直美　いわくら　なおみ

はじめまして。私は今春より、学校改革マネジメントコースに入学した岩倉直美と申します。勤務先は、平成 28 年度浪花認定こども園になりました。合同カンファレンスなどで自己紹介をすると、「大阪からですか？」と聞かれがちですが、大阪ではありません。福井県越前市の旧町名が浪花町(現在は府中 3 丁目)というところで開園(昭和 35 年)したので、その町名が園名(浪花保育園)となり、昭和 50 年 5 月社会福祉法人に認可されました。園長は住職でもあり寺院(天台宗)が併設されています。園の遊戯室にはお釈迦様とお地蔵様が安置されています。子ども達は 1 週間に 1 回、園外散歩、入園式、卒園式などには手を合わせます。園庭には地蔵堂もあります。宗教的なことは保育の中にそれほど導入されていませんが、お釈迦様生誕の花まつり(5 月)、涅槃会(2 月)、地蔵まつり(8 月)は行っています。私は仏様の世界には興味関心はありませんでしたが、平成 9 年に比叡山延暦寺(天台宗)で行われている結縁灌頂に出会ってからは、様々な仏様の存在のいわれや仏像の特徴などを知る機会を得ました。今年は 20 回目の結縁灌頂に 6 月に参加し、お釈迦様とのご縁を頂きました。毎年

その儀式に参加するだけですがこれまでに縁を結んでくださった仏様(結縁潅頂に現れる仏様は、釈迦牟尼如来、大日如来、薬師如来…20 回の中で私がまだご縁を頂いてない仏様、阿弥陀如来、地蔵菩薩、観世音菩薩)には、親しみを感じて感謝をしています。寺社仏閣巡りをしてご朱印を頂くことも楽しみです。信仰があっても家庭で手を合わせる習慣は少なくなってきていると思いますが、私は信仰がなくても遊戯室で子ども達と手を合わせる時は、心が穏やかになる一瞬を感じています。子ども達も成長していく過程の中で感じていってほしいなと思います。

幼児教育と向き合うことは 37 年目です。5 年ほど異業種に携わった経験がありますが、そこでの学びも含めて幼児教育への振り返りと、一園の勤務の中での様々な学びのまとめをしたいと思っていたことや、定年退職の節目として平成 28 年度に県幼児教育支援センターが実施するアドバイザー養成研修を受講したことが、自分の中の幼児教育への新たな扉をひらくきっかけとなり、教職大学院で学びたいという気持ちになりました。

4 月、5 月の合同カンファレンスでは、常にメンバーが異なるグループセッションに戸惑いながらも、聴き合う・語り合うことをしていく中で自分の考えが整理されていくことに心地よさを少しずつ感じています。クロスセッションでは、マネジメントとはやりくりと考えてみてはどうかという助言を頂き、学ぶことの価値や意義をおさえて何をしたい・するのかを明確にして、実践していること・したことを整理していこうと考えています。

6 月のラウンドテーブルでは、異業種の方の報告を聴き語り合っていく中で、どこかでは各々に考えや実践していることなどにつながりがあり、課題などは解決できなくても糸口を見いだすことはできるのかもしれないと実感しました。

教職大学院の学びのスタイルを吸収しながら、幼児教育の遊び中の学びの重要性と、楽しさやおもしろさを保護者や地域社会に伝えていき次世代につなげていく努力をしていきたいです。2 年間、ご指導をよろしくお願いいたします。

学校改革マネジメントコース１年/小浜市立遠敷小学校

安田　雅之　やすだ　まさゆき

今年度より、学校改革マネジメントコースで学ばせていただくことになりました安田雅之と申します。昨年までは１３年間中学校で、担任や学年主任として勤務しておりましたが、この４月より異動となり、現在、小浜市立遠敷小学校で教務主任を務めています。この遠敷小学校は、目の前にある若狭姫神社のほか、校区に若狭彦神社、神宮寺、国分寺などの名所をはじめとして、お水送りが行われる鵜の瀬や、小浜と京都を結ぶ鯖街道のルートがあり、歴史的遺産が数多く残されているほか、将来開通する北陸新幹線の駅もこの周辺に造られる計画となっており、今後発展していく地域ではないかと思います。

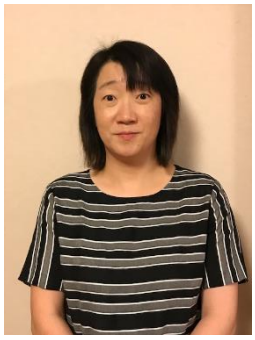
私は、平成元年に教員採用でしたので、今年平成２９年は教員２９年目ということになります。採用時は、まだ土曜日は半日授業日で、土曜日の午後も日曜日も部活動指導という状況でした。パソコンもまだなく、学級通信は手書きでしたし、成績処理も電卓を使って行っていたのではないかと思います。視聴覚機器もテレビ放送やＯＨＰを使うことがある程度で、ほとんどは黒板とチョークでの授業でした。現在、週休２日制となり、ネットワークで文書管理や情報共有が簡単に

できるようになり、ＩＣＴが普及し授業で有効に活用されるなど、学校教育も以前と比べて格段に便利に効率的になったと思います。しかし、逆に教員の多忙化は年々進んでいます。以前は、もっと日々の授業の教材研究をしたり、子どもと関わったりする時間があったように思いますが、やけに余裕がないように感じます。教員が、毎日元気に働くことができ、子どもの力を伸ばすことに専念できるような環境を作っていくことが学校改革の第一歩ではないかと思います。

私は、昨年まで中学校の吹奏楽部の顧問をしていました。自分自身が、中学校の時に顧問の先生からの誘いで、強い希望があったわけでもなく吹奏楽部に入部したことがきっかけとなり、その後の自分の人生においても吹奏楽が大きく関わってくることになりました。その時の先生との出会いや打ち込んだ経験が、教員になりたいという思いを強くしたように思います。小学校や中学校時代に出会ういろいろなことすべてが、その子どもにとっては大きな経験となり、その後の人生に大きく関わってくるものです。私たちはその大切な出会いを担当していることに、しっかりと責任を持って、毎日の授業や行事に臨んでいきたいと思います。

平成３１年度には遠敷小学校と近隣の３つの小学校が統合され、小浜美郷（おばまみさと）小学校が開校することになっています。現在、その準備が着実に進められています。地域の小学校がなくなり、新しい小学校ができるということは、そこに通う子どもたちだけでなく、地域に住む方々にとってとても大きなできごとです。地域と学校が一緒になって、遠敷小学校の閉校に向けて、しっかりと締めくくりができるように教務として関わっていきたいと思います。

また、この大学院での、年代や立場の違う方々との出会いを大切にしながら、自分の実践を振り返るとともに、自分の物の見方や考え方の幅を広げていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。



学校改革マネジメントコース１年/福井県教育総合研究所

塚田　孝子　つかだ　たかこ

２年前、「学び続ける教員」として２０年間の小・中学校での自分自身の実践を振り返り、理論を学んで理論に裏打ちされた実践にしていこうと研究所に異動した。いろいろな研修で理論を学び、研究協力校での実践を積み上げていく中で、実践から新しい理論を構築していくという福井大学教職大学院の学びに魅力を感じ、今年度から２年間、学校改革マネジメントコースで学ぶことにした。

私の勤務する教育総合研究所は、今年の４月から新体制でスタートした。私の所属する教育相談センターでは、来所面談や電話やメールでの教育相談活動のほかに、教育相談に関する教員研修とユニット研究を行っている。教員研修では主に、「学校サポートプログラム」として、小中学校において、ソーシャルスキル教育やピア・サポート活動を中心としたプログラムの実施による学級経営力向上に関する支援を、継続的に学校に訪問して行っている。これは、いじめや不登校の未然防止を目的としたものでもある。また、ユニット研究では、「事例から学ぶ学校サポートプログラム活用集の作成」についての実践研究ということで、2年間の実践研究をもとに作成したプログラムをいかに学校のニーズに合わせて提供していくかということを研究の目的としている。

「教師個人と教師集団の高い力量が優れた実践を生む」ということは当然のことながら、これまであまり重視されてこなかったように思われる。しかし、現在学校が直面している課題を解決していくためには、学校現場において、個々の教師の専門性と教師集団のチーム性を高めていくことが重要である。教職大学院での研究課題は、「学校の実態に合わせたピア・サポートプログラムの工夫」としたが、大学の先生方や学校現場の先生方との大学院での学びと並行して小中学校の現場での実践を積み重ねる中で、より学校の実態

に合わせたプログラムの工夫を図っていきたいと思っている。

ピア・サポートとは、「仲間同士の支え合い」という意味であるが、自分自身も教職大学院で学び合う仲間に支えていただきながら、自分自身が力量を向上させ、研究所の訪問研修等を通して少しでも現場の先生方のお役に立つことができ、子ども達の幸せにつなげることができたらこの上ない喜びである。これから２年間の「学び合い」が本当に楽しみである。

学校改革マネジメントコース１年/坂井市立高椋小学校

佐藤　恭二　さとう　きょうじ

今年度、福井大学教職大学院学校改革マネジメントコースに入学しました佐藤恭二です。どうぞよろしくお願いします。現在、坂井市立高椋小学校に勤務し、今年度で４年目、６年生担任・生徒指導を担当しています。教職について２９年、社会教育主事として２年間現場を離れている期間はありましたが、すべて小学校勤務です。美浜町での３年間の勤務の後の２０年間は、ずっと三国町内の小学校におり、その後丸岡町への異動となりました。同じ坂井市内の小学校でありましたが、学校のシステムや職場の雰囲気の違い、児童や保護者の違い、職場での私自身の立場の違いなど戸惑いの連続だったことを鮮明に覚えています。遅すぎた感はありますが、４年目にして、ようやく学校の全体像や流れが見え、自分の立場を発揮して、少しは勤務できるようになったような気がします。学校の現状を見つめ、児童としっかり向き合い、教員間の連携を大切にしながら自分なりに頑張っているつもりです。しかし、今までのやり方から脱却できない視野の狭い自分がいることも感じています。

そんな中、教職大学院での研修の話がありましたが、私にとって、正直全く頭にもよぎらなかった道でした。レベルアップのチャンスというより、「もっと視野を広げ職務に励めよ」という試練に感じました。大学院に入学してから４か月になりますが、毎月のカンファレンスやラウンドテーブルに参加し、県内の先生方はもちろん、ファシリテーターの先生方、全国各地からのさまざまな校種・立場・世代の先生方との交流を通して、幅広い考え方や斬新的な実践、効果的な指導法などに触れることができ、私にとって質の高い学びになっていると感じています。同時に、自分自身の勉強不足、向上心不足を痛感する時間にもなり、もっと頑張っていかなくてはいけないと奮起する時間でもあります。これまでの実践を見直し、修正し、再構築していく必要性を感じています。

現在でも、教職大学院での自分自身の学びの柱が揺らぎ、不安が払拭できないでいる日々ですが、この２年間は、試練をチャンスと思えるような学びをしていきたいと思っています。そして、ここで得られた学びを、学校現場に、職員間に、そして児童に還元できるようにしていきたいと思っています。教職大学院のスタッフや一緒に学ぶことになった院生のみなさん、よろしくお願いします。

学校改革マネジメントコース１年/福井県特別支援教育センター

岸野　美佳　きしの　みか

はじめまして。この春、学校改革マネジメントコースに入学しました岸野美佳と申します。私は、福井県特別支援教育センターに勤務して７年目になります。当センターは、県内の特別支援教育の振興を図るために設置された教育機関です。せっかくの機会ですので、当センターの紹介をさせていただこうと思います。

当センターは４つの大きな柱を掲げて業務に当たっています。それは、子どもたちが通う『園・学校』を支える、子どもたちの育ちを支える先生方の『専門性』を支える、子どもたちの『保護者』を支える、子どもたちの『就学』を支える、です。具体的な業務は、１８歳までの支援を要する子どもたちが通う園・学校への訪問相談を中心に据え、先生方に特別支援教育の力量を高めていただくための研修の企画運営、保護者・子ども向けの相談会の実施、保護者と園・学校をつなぐ保護者支援、市町教育委員会の就学相談への協力等々と、特別支援教育全般にわたっています。近年では発達障害児の相談・研修支援の色合いがますます濃くなっているところです。

特別支援教育センターは、全国の都道府県、政令指定都市に６１機関あります。その中でも特別支援教育の単独設置機関は、当センターを含め９か所しかありません。このような環境下であるからこそ、当センターは園・学校に直接訪問し、先生方の生の声や本人の学びの姿を通して、現場のニーズにより密着した相談や研修支援をさせていただくことができるのではないかと思っています。

前述の訪問相談について、もう少し詳しく説明します。センター所員は、子どもの授業参観や学校からの聞き取り、必要に応じて検査もしながら、子どもが学校生活や授業の中で頑張っている姿や困っている状況を把握します。そして、先生方が子どもに身につけてほしい力を検討したり、今できる支援や配慮を整理したりして、子ども、保護者、園・学校が本人の教育的ニーズについて合意形成ができるよう、センター所員が協力させていただいているところです。園・学校にほとんど出向く毎日ですが、どの所員も日々の悩みやストレスとうまくつき合い、専門性をしっかり担保しながら業務に当たっています。その原動力になっているのは、お互いに助け合い励まし合うチーム力であり、自身の実践研究事例を出し合い、意見交換し研鑽し合える学びの場が所内に保障されていることだと思っています。

本レポートをお読みいただいた特別支援教育の現場で実績を積んでおられるミドルリーダーの先生方をはじめ、特別支援教育を学んでおられる学生の方々も是非、当センターで特別支援教育の専門性アップを目指し、福井県における特別支援教育のさらなる推進にご尽力いただければ幸甚です。

学校改革マネジメントコース１年/福井県立羽水高等学校

川崎　直樹　かわさき　なおき

今年度から学校改革マネジメントコースにお世話になることになりました川﨑直樹です。よろしくお願いいたします。現在は、本校教務部の下部組織として位置づけられている「ISN 事務局」の事務局長として、日々、プロジェクト学習のカリキュラム開発に取り組んでいます。

今年で羽水高校勤務１２年目に突入しましたが、振り返れば羽水で過ごした日々は、クラス担任業務と放送部の指導に明け暮れる日々でした。特に放送部については番組作りに軸足を置き、全国優勝を目標に（まだ達成できていませんが…）、生徒ともども頑張ってきました。また、県高文連放送部会事務局の仕事も引き受け、ここ数年はすっかり「部活の人」になっていたのですが…。

一昨年の秋、羽水高校が ISN（国際イノベーションスクールネットワーク）の福井クラスター校に指定され、その事務局を担当せよとの指示を受けました。そして、訳も分からないまま「プロジェクト学習とは？」「今、生徒に求められる力とは？」といった、これまで真剣に向き合うことのなかった問いに晒されることになりました。「とにかく何とかしなくては」の一念で、先進校の事例を学び、様々な書籍を購入し、自分なりに理解を深めようと努力はしましたが不安や焦りはどんどん募ります。そんな中「教職大学院で学んではどうか？」とのお声かけをいただきました。ある意味、「渡りに舟」だったわけです。

教職大学院で学びはじめて、三ヶ月になりました。正直言って、自分の中の不安や焦りは解消されていません。むしろ、合同カンファレンスやラウンドテーブルで語り合った先生方の素晴らしさと、自分の至らなさを引き比べ、自らの能力と容量の不足を強く感じる日々です。…ですが、なぜか下を向く気にはなれない。恐らくそれは、教職大学院での学びから得られる様々な刺激に大きな可能性を感じているからです。先生方の語りの中には、今までの自分にはなかった物事の捉え方、具体的なノウハウ、教育への熱い情熱など、本当に様々なものが含まれています。そうしたものをいかに取込み、生かしていけるか？…と考えると落ち込んでいる場合ではないのです。自分にとって教職大学院での学びは大きなチャンスであり、チャレンジでもあります。こうした機会を与えて下さった同僚の方々や家族、そして支えて下さる教職大学院のスタッフの方々やともに学ぶ先生方への感謝の気持ちを忘れず、ここで学んだことを羽水の生徒たちに還元していきたいと考えています。

ミドルリーダー養成コース１年/福井大学教育学部附属義務教育学校
松田　ひとみ　まつた　ひとみ

現在、福井大学教育学部附属義務教育学校に勤務しております。教科は英語で、今年度は８年生の担任をしています。後期課程に加え、前期課程５、６年生の授業も担当しています。

さて本校では、研究主題「自律的な学びのイノベーション　探究するコミュニティを培う」に基づき、授業研究を行っています。私は、英語科における自律的な学びとは何か、探究とは何か、について日々考えています。

最近は学習者オートノミー（自律）について考えることが多くなり、関連する書物を読んだりしています。しかし、まだ自分なりの答えは見つかっていません。学習者オートノミーにとって必要なことはたくさんあり、例えば、疑問を持つ力や、挑戦してみたい気持ち。これは、本校の研究で言うところの「発意」の部分で、学習のスタートとも言える重要なものだと思います。英語科では、表現したい気持ちかもしれません。さらに、必要な力として、目標を持つこと。本校では「構想・構築」の部分で、どのように学ぶと良いか計画を立て、学習のための下準備をする段階です。英語科では、表現を学ぶところでしょうか。そして、次に、実際にやってみる。本校の研究で言う「遂行」の部分。英語科では、４技能を使い、表現する部分です。それから、学習者オートノミーに必要なこととして、自己省察が挙げられると思います。本校の研究では「省察」の部分。英語科で言うリフレクション。次にどうしたらうまくいくか考える段階です。これらのサイクルを何回も経験し、試行錯誤しながら、学習者は学んでいくのだと思います。そして、その学習者オートノミーは、教師の適切な支援があってより一層良いものになっていくのだと思います。学習者オートノミーについては、様々な見方や考え方があり、まだまだ勉強中ですが、実践していく中で、教職大学院で先生方にご意見をいただき、自分なりの答えが見つかればと思っています。

さて、本校ではグローバル教育を推進しており、現在、シンガポールをはじめとした海外の学校とテレビ会議システムを使用した授業を試みています。国によって、Wi-Fi 環境が違い、通信が途切れてしまうなどのトラブルがあったり、お互いの時間割やカリキュラムを調整したりするところが難しいです。難しいといっても、一人でできることではありませんので、学校全体や外部の方々の協力を得ながら進めています。現在は英語科の授業を中心にテレビ会議システムを使用した授業を行っていますが、今後、他教科でも協働プロジェクト型学習が展開できればと考えています。グローバル教育における可能性はたくさんあります。子どもたちが大人になる頃には、更にグローバル化が進み、きっといろんな国の人たちと共に働く機会が増えていることと思います。多様な価値観を知ると共に、自分や身の周りについて見つめ直し、捉え直すことで、新たな価値観に出会うことができるのではないかと思います。そのような機会を子どものころから持つことで、人として、豊かに成長できるのではないでしょうか。

今回、教職大学院で学ぶにあたり、自分の中にある、実践に対する漠然とした疑問が整理され、自分なりの答

えが出せるといいなと思っています。先生方から様々なお話をいただきながら、答えを出していきたいです。どうぞよろしくお願いいたします。

ミドルリーダー養成コース１年/福井県立若狭高等学校

小坂　康之　こさか　やすゆき

水産科の教員として１６年間、課題研究をはじめとする探究的な学習に教育的な効果と意義を感じ、実践してきました。

赴任した当時は、とても元気のある水産高校の生徒たちに、どうやって学びを深めていこうか、社会で必要な資格で試みたり、最先端の水産海洋学の内容を教えてみたり、さまざまな内容で挑みました。ある先生から地域の水産の現場で困っていることを調べてみたらと助言を受け、生徒たちと水揚げが行われている漁港に行き、地元の漁業者の方々と生徒たちを引き合わせました。授業中に生徒を校外に連れて行くことや生徒の規範意識を指導してから連れて行くべきとのご指摘も受けました。

しかし、今までの私の試みの中で一度に生徒たちの顔が変わり、挨拶をするようになり、メモをとるようになり、座学の取組みが、改善されていくことを見てからは、我を忘れて、毎日のように夢中に学習計画を立てました。地元企業と新商品の開発や学校給食のメニュー作りを行ったり、生徒と海に潜りアマモ（海草）の再生活動を行ったりしました。活動が地域に広がり、行政の政策や商品化にもつながりました。

地域の課題は、科学だけでは解決できない、社会的な背景や経済状況なども複雑に入り組んでいます。わからないことのおもしろさ、解決が非常に難しいけれど、現実的な社会に直結する応用的要素を含む探究的な学習は、元気いっぱいの水産高校生たちには、自らの力を発揮できるベストマッチな学習だったのです。さらに、一部ではありますが、学習を終えた生徒が、基礎の学習をするようになりました。すべての生徒は、どんなに苦しい状況でも正しく、学びたい、そして成長できるのだと実感させてくれた授業でした。

統廃合された若狭高校においても全ての学科において総合的な学習の時間や SSH 特設科目で探究的な学習が積極的に実施されています。SSH 研究部という探究的な学習を推進する部署に所属させていただき、改めて「なぜ、探究的な学習は良いのだろう」「そもそもどんな力が育成されているのか」「卒業後、本当に役に立っているのか」問いが湧いてきました。野生の勘を頼りに探究的な学習に行き着いた私は、この問いに大変興味を持っています。

教職大学院では、この問いの答えを見つけたいと思っています。現在 OECD のイノベーションスクールネットワークの取組みをさせていただいております。他国で行われている探究的な学習の取組みや評価方法を比較検討するなかでも上記の問いを深めていきたいと考えております。

インターンシップ／週間カンファレンス報告

新しい環境が自分を変える

教職専門性開発コース２年/福井大学教育学部附属特別支援学校　　廣田 久奈

梅雨の季節となり、雨が嫌いな私としては本当に嫌いな時期である。新しい院生が来て早３か月が経とうとしている。新しい環境でのスタートでもあったため駆け抜けてきた気がする。もう時間がこんなに過ぎるとは、もう少しゆっくり進んでくれても良いのに…と思う日々である。

インターンシップ（課題別実習）では高等部に所属している。昨年とがらりと変わった環境である。週１回金曜に行っているが、なかなか慣れないのが現実である。中学部から一緒にきた１年生の子らと久しぶりに話すと、「毎日がスピード勝負。」という言葉が出てきた。やはり就労を目指すため、日々やることがた

くさんなのである。私自身高等部ははじめてであり、「みんなすごいなー。」と感心して見ている。また様々な子どもたちとかかわることが多くなり、はじめての行事に参加させて頂き、子どもと一緒に学んでいる。

福大附属特別支援学校では、『レインボータイム』という時間がある。金曜日に行く理由の１つとして『レインボータイム』を見るためである。『レインボータイム』とは、小学部１年から高等部３年まで縦割りに５つの班に分けて活動する。私はウッド班の中に入り活動を見ている。ウッド班にはかかわりのあった中学部の子もいれば、普段あまりかかわらない小学部の子ども達もいる。高等部の子が必ずしも下級生を引っ張るというわけでなく、中学部の子が上の子や下の子を引っ張っていることもある。新しい子どもの姿を見ることができ、とても嬉しく思っている。現在、いかだづくりに励んでいるウッド班は、いかだを実際に見に行き、ペットボトルを集めたりとそれぞれの役割を見つけたりすることに取り組んでいる。これからどのようないかだが出来るのか楽しみである。

一方週間カンファレンス（以下木カンと記す。）では、ファシリテーターとしての役割が必要とされる。話を聞いて「あぁー。」と思い、考えているうちに新しい話に行くことが多くなる私には大変難しいことであった。M2 会議の中でもみんながどうしているのか聞いても悩むばかりであった。何に悩んでいるのか、どうすれば良いのか分からなかった。もやもやしながら主担当企画では、「学びとは？」をテーマに３週に渡り取り組んできた。その中で院生の言葉を引き出すことがあまりできず、1 週目が過ぎ、2 週目は先生のアドバイスから自分の考えを持ち、主担当企画に臨んだ。上手くはいかなかったが、他の院生の考えを受け止め、グループの中でそれぞれが話す環境になっているなと思った。しかしそれは入ってくれていた先生のおかげである。3 週目はまとめということもあり、なかなか思いを引きだし、深めることが難しかったが、様々な視点を用いて話すことができた。考えを絞っていくことができなかったが、最後に長崎から来て下さった先生の言葉が締めの言葉になり、とても助かった。M2 会議の時に他の院生にアドバイスを貰ったりする中で徐々に感覚は掴むことができた。授業に生かすことも出来るし、自分の中で話し方が変わったと感じる時がある。話の聴き方も少し変わったような気もする。しかしファシリテーターのこと自体分かっていない。どのようなものがファシリテーターなのか、上手なファシリテーターとは何か考えていく必要がある。知らず知らずに実践していたことで、理論がないためにどうして進めていったら良いのか右往左往して分からなくなる。自分で理論を吸収していくこともしていかなければならない。他の SM2 はどう考えているのか分からないが、実践で身に付けることも大切ではあるが、理論として知っておくことも大切だと思う。何故この企画をやっているのか、私の考えは何か、相手にどのようなことを考えてほしいか、一旦自分自身で考えることも必要である。新しい環境になったからこそ考えることができたと思う。

「心機一転」

教職専門性開発コース２年/福井市至民中学校　　竹内　瑞貴

二年目のインターン生活がスタートした。今年度最初の職員会議で校務分掌が発表された。至民中学校全体で 10 名の先生が移動されたため、学年編成に大きな変革があった。私としては、昨年度と同様の学年につきたいという思いがあったが、今年度は昨年度とは違う３学年に配属されることになった。

昨年度の１年間、生徒と心で向き合いどんな話も絶対耳を傾けることを大事にしてインターンシップを行った。生徒との関わりの点においては、どの院生にも負けない自信があった。始業式の日に担任の先生が転任されたため副担任として最後の学活をさせていただいた。始業式で配属が発表され、私が三年生に移動すると生徒もわかっていた。３０分の学活で自分の思いをクラスの生徒に語った。このクラスで本当によかったこと。1 年間副担任としてクラスに入っていて、担任の先生がみんなに伝えたかったこと。心で会話をして心で応じてくれたこと。２年生に残りたかったこと。みんなと宿泊学習にいきたかったこと。など・・・自分の想いを全てさらけ出した。「先生三年生にいかないで」と涙ぐんでくれる生徒もいた。「先生が来る水曜日絶対三年生の所にいってお話しに行く」そういってくれる生徒もいた。とても

嬉しかった。1年間一生懸命やってきて本当に良かったと思えた。

昨年度に比べてインターンシップの回数は減り、週1回となった。新しい学年で新しいクラスに副担任として配属されたが、昨年のように生徒と深く関われてなかった。唯一コミュニケーションを取ることができたのが、部活動の生徒だけであった。週1回だけしか行くことが出来ないので当然と言えば当然であるが、それでも昨年に比べて生徒とコミュニケーションを取ることができずに信頼関係も築けずにいた。クラスの生徒と休み時間に話しをして一緒に笑いあえた光景が今年は無い。自分がただ後ろで授業や朝の会、帰りの会を見ているだけの人でクラスに馴染めず、クラスの部活動の生徒にも「クラスに馴染めていないね」と言われた。正直に言うと毎週水曜日インターンシップにいくことが憂鬱になっている自分がいた。

「もっとクラスに入っていって！」昨年メンターの先生からいわれたことである。自分では生徒と関わっているつもりであったが、教師としてあるべき姿や、厳格でいなければならないという想いから私という人間を封じ込めていた。そして、上面だけで人間味のない関わりをしていた。関わり方を変えようと思ったが、自分の指導や関わり方が本当に正しいのか分からない。この相談した際に頂メンターの先生からい頂いたアドバイス。「私が指導を行っているとき、本当に正解かわからないけど、自分を信じてやってきた。失敗したこともあるが、失敗したらそこから変えていけば良い。」これらのことを思い出した。生徒との関わりの面で自信があったのはこのアドバイスを頂いて、自分が変わったからである。これを再び思い返し、もっと思いきり自分から積極的に関わっていこう。自分らしさを出して、生徒とコミュニケーションをとっていった。

そうして3ヶ月過ぎたいま毎週水曜日が一週間で一番楽しみになっている自分がいる。休み時間には生徒と勉強の話から部活動の話などをして、しっかりコミュニケーションを取れている。そこには私も生徒も笑顔に溢れている。昨年度メンターの先生から頂いたアドバイスを実践に生かすことができている。

また、持ち上がりで2年生に配属されたいとおもっていたが、今は3年生に上がれたことに大変感謝している。新しい学年で新しい生徒との出会い、そして新しいメンターの先生や学年の先生との出会い。その多くの出会いで自分が成長することができた。新しい出会いに感謝してこれからもインターンシップを行っていきたい。

「実践を通して、視点が広がる」

教職専門性開発コース1年/福井市明新小学校　　浅島　眞言

私は、今年の4月より福井市の明新小学校にてインターンシップを行っている。学級は2年生の1クラスをメインとして、2年生の5つの学級をみている。

私は、この7月までに、私は多くの授業を受けもたせて頂いた。これは、通常のマスター1年生のインターンシップ生ではみられないと、言われた貴重な経験をさせて頂いた。私は、自分が授業をすることを通して、学びや新たな展開が生まれきた。

授業は、主に図画工作の時間を頂いた。これは、私のメンターである伊與教諭が、次こんな題材を図工でしようと思うんだという何気ない一言から、私が面白そう！どんな絵を子どもは描くんだろう？とつぶやいた所、じゃあやってみる？というフワッとした流れから実践が決まった経緯があった。正直なところ、私は、図画工作ってなんだ？どんな指導や支援がいるんだ？というイメージが膨らまず、どんな授業になるのか掴めなかった。しかし、子どもの作品が出来上がること、またその過程がどうしても気になったので、チャレンジしてみたいと強く思い実践を行った。

授業は、「自分だけ、世界には存在しない、世界に一つだけの花を書こう！」という発問からお花を描く活動を行った。

見本となるお花をいくつか見せ、「〜にみえる」「グルグルだ」「ハートの形がある！」といったこれから描くイメージを膨らませていった。描き終えてみると、子どもたちを見回すと、全ての子の作品それぞ

れにオリジナリティーがあり、全く同じものはできなかった。また、子どもの表情をみても、どう？すごいでしょ？と言わんばかりの満足げな顔を浮かべている。イメージが浮かばず、中々描けなかった子たちも、完成してみれば、立派な自分だけのお花が描かれ得意げな様子を浮かべていた。

完成した子どもたちは、お互いに描いたお花を見せ合っていた。「すごい！」「きれい！」「僕のいいでしょ？」といった言葉が周囲から聞こえてくる。しかし、誰も「うまい」「じょうずだね」「下手だ」といった、優越をつける言葉を掛け合わない姿があった。お互いの多様性を認めているのだろうか？私が聞き漏らしていただけなのだろか？見本とオリジナルの作品を作ろうといった発問だけで、それぞれ作品が違い、それを認め合える学級。また、完成した後の表情をみても、真剣に取り組んでいた様子もわかる。子どもの絵に対する興味をうまく引けてのせられたからだろうか。その興味の引き出し方・のせ方ってどの教科に対してもいえるのではないだろうか。
インターンシップが始まった４月当初には、課題のある子をどう授業に主体的に参加させていけるんだろうか、という意識をもって実践を行っていた。授業を通して、どのように興味をもたせて、課題に取り組んでいけるか、そういった自分からやってみたい！という授業の展開をどのように作り出すと良いのかについて、私は考え始めている。インターンシップを通じて、より新たな変化に気づき、様々な視点を得たい。また、木曜カンファレンスや合同カンファレンスといった場で、他の先生方が、どのように授業を展開している、いこうと考えているのかについても知りたい。自分にはない多様な考えを拾い、色々な視点を基に授業づくりをしていきたい。

自分の言葉で実践を語ること

教職専門性開発コース１年/福井県立福井東特別支援学校　　藤田　彩恵

大学生のとき、特別支援教育の講義において、初めて出会った言葉が複数あった。例えば、梅津八三の使用する「信号」といった言葉や、「緩衝行動」といった言葉などである。大学の先生の話をお聞きした瞬間には、その言葉で説明できる事柄に感激し、心が満たされるような感覚さえあった。心が動いた言葉であったが、その講義内容について友人と話題にした際、その言葉の説明がうまく言葉にできず落ち込んだことを覚えている。

私が、うまく言葉で表現できなかった場面は、普段聞きなれない言葉の意味を伝えようとした場面だけではない。特別支援教育を専門に学ぶ学生が集う授業に参加しその感想を書くとき、当たり障りのない文章になってしまうことがあった。文章の中に自分の中にあったはずの疑問や気づきを反映させることができなかったといえる。大学生活で得た苦い経験は「自分の言葉を育みたい」という思いに繋がっていった。

教職大学院へ入学し、自分の実践を語る機会を定期的に得ている。例えば毎週木曜日にある週間カンファレンスでは、インターンシップを通し考えたことやそこでの子どもとのやりとりについて言葉にする機会が保障されている。インターン先で目にした子どもの姿を、その子と出会ったことがない人にどのように伝えればよいか迷いながらも口にすると、院生や大学の先生方が「それって、こういうこと？」と話の共有を図ろうと言葉を返して下さるため、いつの間にか積極的に話していることが多い。

自分の実践を口にする中で、聞き手に質問されたことに戸惑うことがあった。私は、大学での学びをもとに「子どもの“目線”を介してやりとりを行う」という文を違和感なく使用していた。しかし、「どうして、障害のある子のコミュニケーションツールとして“目線”を育むことが大切なの？」と問われたとき、言葉がスムーズに出てこなかった。私はこのとき、「分かったつもりで、使っている言葉があること」に気づかされたように思う。

週間カンファレンスを通し、自分の実践を振り返る視点を得たこともある。教室の広いカーペットの上で仰臥位をとる上下肢肢体不自由の子どもに対し、音楽絵本を見せてかかわりをもった場面を言葉にした。音楽絵本を見せてすぐにその音を鳴らすと、子どもの両手に力が入った。私一人では、その反応があった様子を「落ち着いているよう」としか捉えていなかった。しかし、話を聴いていた人は「音に反応したの？それ

とも出てきた本が目に入ったのかな？」という言葉を返してくれた。私は、その言葉を聞き、自分の子どもの反応を捉える目が大雑把であったことに気づかされた。その気づきをもとに、子どもが何に反応しているのかを意識しながらビデオを観ることを行った。すると、以前は「なぜか子どもは周りを見渡し始める」と捉えていた場面を「向こうにいる先生の歌う声が聞こえたため、目を向ける」と捉え直すことになった。

私にとって、週間カンファレンスはインターンシップについて「自分の持つ視点だけでは気づいていなかったことに気づかされる場」になっている。また、自分の言葉で実践を語るため、自分の言葉の使い方を意識する場でもある。週間カンファレンスとインターンシップという学びの場が並行して存在することに感謝し、そこでの気づきをこれからも大切にしていきたい。

ラウンドテーブルに参加して

2001 年 3 月，21 世紀とともに始まった　**実践研究　福井ラウンドテーブル**は，今回 2017 年 6 月 23 日(金)から 25 日(日)の 2017 summer sessions の開催をもって 33 回を迎え、全国各地からたくさんの皆さんにご参加を頂きました。

今回のラウンドテーブルも，多様な実践と省察との出会いに満ちていました。初日のプレセッション，２日目には学校（Zone A）・教師（Zone B）・コミュニティ（Zone C）・授業（Zone D）の各領域に分かれたセッションを展開し、そして最終日のクロスセッションでの語り合い・聴き合いへと続きました。

「学び」ラウンドテーブルを終えて

教職専門性開発コース２年/福井大学教育学部附属義務教育学校　　田中　亮

去年と合わせて人生で 3 回目のラウンドテーブルに参加させていただいた。去年と明らかに違った点は、自分が報告者として現職の先生方、大学の教授の方々の前で１年間行ってきた「インターンシップにおける生徒とのかかわり」「教科の意義を踏まえた授業実践」「木曜カンファレンスにおけるふりかえり、自己の考え方の変容」などについて報告させていただいたことである。日々の失敗や実践時の自分の感情を織り交ぜて話をさせていただき、聞いてくださった先生方から、私の考え方や実践に対しての肯定的ない意見や、先生方の経験から私の失敗に対するアドバイスをしていただいた。自分の実践を価値付けていただいたことで次への課題が明確になり、やっていきたいことへの自信が生まれた。普段木曜カンファレンスでインターンシップにおける振り返りを行っている。ラウンドテーブルの良さは、普段の学生同士の振り返りだけでは見えてこない視点をさまざまな経験を重ねてきた他県で活躍されている先生方から言葉をいただくことによって、自己の実践をより深く省察することができることだと考える。

実践報告会では東京大学教育学部附属中等教育学校の福島教諭の実践を聞かせていただいた。福島教諭の実践では、「肝高の阿麻和利」・「琉球舞踊」といったダンス・身体表現を通して「５つの力」(「ことばの力」「論理の力」「身体・表現の力」「情報の力」「関係の力」)を身につけさせるための総合的な学習を行っていた。

報告時の福島教諭の言葉に多くの感銘を受けた。まず「境界を越える探究学習」とは答えのないもの(問い)を自分自身で追及していく。そしてその探究を行っていくのは生徒自身、であり、「こうでなければならない」ということはいっさいなく決めていくのは子どもたちであるということ。そして福島教諭の考える「深い学び」として、現在自分自身が持っている知識を、「こうあってほしい」という思いを持ちながら現地や現場(本物を知る)に持っていってすり合わせることであり、学ぶことによって新たな自分に出会える。自由になれる。それが学ぶことの喜びでありそういった生徒の学びを福島

教諭は「たくまざるして、たくらむ」ことが大切で、まずは教師の考えていることに生徒が少しでも乗ってくれること、そして乗ってくれた先は生徒がきめることが大切であるとおっしゃられていた。私自身もここ最近木曜カンファレンスなどを通して、「学びとは」「深い学びとは」「探求とは」といったあたりまえにあるものを再度自分自身でその意義を捉えなおすようになった。こういった自分の中でわかっているようでわかっていないことについて大規模な実践の結果に基づいてそのようなことに関する考え方を聞けたことも自分にとってはとても大きな学びであった。

教職大学院生として参加できるラウンドテーブルは残り一回である。ラウンドテーブルではいろいろな立場の人々がそれぞれの目的に応じて学びたいと思いつくられている。私も残りの半年、実践を積み重ね、振り返ることで「学び」を深めていきたい。

「私」を語り合うことで表現する

教職専門性開発コース３年/福井市中藤小学校　　山田　芳裕

「大切にしていることは、実践の長い歩み、そのプロセスをじっくり語り、聴き合い、互いに問い深める時間と空間を生み出したいということです。」何気なく開いた newsletter№99 の見開きにある、専攻長柳澤昌一先生のお言葉である。今回のラウンドテーブルでは、この言葉が意味するであろう、ある種の「渦」に、ここまでかと言われるほど巻き込まれた。同時に「新鮮さ」と「熱量」を感じたのだ。ちょうど 2 年前、生まれて初めてラウンドテーブルに参加させていただいた時には感じ得なかった感覚である。福井大学教職大学院が起こす「渦」に、巻き込まれっぱなしだった二日間を振り返る。

6 月 24 日（土）は Zone C に参加した。福井ラウンドテーブルは今回で 5 回目の参加となるが、Zone C の参加は初めてであった。これまでは長期インターンシップに少しでも還元できるようにと、「Zone A 学校」や「Zone D 授業研究」等のセッションに参加することが多かった。今回、Zone C を選択した理由の一つに「コミュニティ」というキーワードがある。またテーマが「異質との出会い」ということで、学校現場とは一味違う人々と、コミュニティの持続的な発展について語ることが楽しそうだと直感的に感じた。会場も福井大学ではなく駅前の AOSSA ということもあり、場所という環境の変化も、ある意味新鮮であった。

Zone C では、福井市の殿下地区にスポットを当て、セッションが始まっていった。突然だが皆さんは「異質」といった言葉に対して、どのようなイメージを持つだろうか。おそらく少しネガティブな印象を受ける人が多数なのではないかと思う。私もそうであった。何か、これまである完成した物の中に、新参者が介入してくるような違和感を覚えたのだった。しかし、半ば強制的に「異質」と出会い語り合うことにより、私の中のイメージは崩れ始める。シンポジストの方の意見としても「『異質』は一般的には排除されるものである」とあった。人間関係においても疎まれてしまったり、トラブルの原因になったりする現実があるからだ。以上の話を理解した上で、近くのメンバーと小グループで軽くセッションを行った。するとある院生は「異質をポジティブに捉えるとするとどうか」と言った意見や「異質を『可能性』とも言い換えられないか。そう思うことで、学びの幅が広がるのでは？」などといった、私の中には生まれなかった意見が数々生成されていった。まさに私の中に「異質」なものが溶け込んできた瞬間であった。同時に心地良さも覚えた。この場に参加していなければ、話すことはおろか出会うこともなかっただろう方と交流することで、掘り固まっていた考えが少し溶け出した感覚であった。新しく、一見逸脱した意見であっても「それ面白い」と、一度受け入れる柔軟な考えを持つことの意義を、少しながら感じることができた。

質の高い福井ラウンドテーブル

学校改革マネジメントコース２年/さくら認定こども園　　伊藤　仁美

「先生、ラウンドテーブルに参加して本当に良かった。とても楽しかったです。他の先生に話を聞いていただくって何ていいのか。どの先生もとっても温かく聞いて下さるし参考になるし、良かったぁ。本当は心臓飛び出るかと思っていたのに、今は次回も参加したいと思うくらい。学校が違っても悩みは同じなんですね。」

同じ職場の２名の主幹保育教諭が、今回報告させていただきました。会場を出てきて直ぐにこの生き生きと発した言葉が返ってきました。四角いテーブルで、他校種あるいは他職種がグループワークするわけですが、１日過ぎてふっと我に返った時、「あぁ、心地よかった。別世界に１日居て、真剣に３人の実践報告について考えた。」という充実感で心満たされるのです。これこそ、真の丸い「ラウンドテーブル」の意味なのだと痛感しました。思えば、去年参加された、幼稚園の教頭先生も、当園の園長も今回は自主的に然も当然のように参加していただき、人の輪の広がりを痛切に感じています。

報告者は与えられた時間内に実践や疑問悩み等を整理し、今後の課題や考察をつけてまとめますし、参加者は人の意見発表をまるで自分の事のように真剣に悩み助言し、そこから報告者も参加者もそれなりに気付き次へのステップになっていきます。この感動が次々伝わっていっているのがこの２日間で手を取るように感じました。

私は１年しか参加していないのですが、色んな会場で再びお会いし、「あらお久しぶりです。」「あ、先生に教えて頂いたポートフォリオを取り入れてすごくよかったです。」「公開研に参加でき、ありがとうございました。」等々縁が縁を生んで笑顔が広がり学び合い次への意欲に繋げるのも、このラウンドテーブルの良さだと思います。

・ZoneＤ　授業研究　子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか

３人の先生方のシンポジウムから、遊びの中の学び、授業の中で見とる、しゃべらない子を見とる、などこれからは表出した言葉だけでなく生徒の様子を見取って学びを高めながら繰り上げていくことをしていきたい。分からない時、どうしたら聞き合えるのか本物をしっかり子どもに繋げて教員がモデルになるといいという言葉が胸に響きました。

・美浜町せせらぎ保育園の発表

美浜町の各園が事例発表し合い、学びについて物語る、エピソードを分析して発信したり、保護者総会時に説明したり、町全体で接続研修をずっと続けているそうです。そして、振り返りというのは座学の始まりですよ、と教えて頂いたという事で、振り返りを大切にしていました。

・クロスセッション

福井大学探求ネットワーク、紙漉きブロックからの報告。年間のテーマがあり、四季に分けて活動。子どもの目標、スタッフの目標を立てて運営していました。２年目は子どもを主役としてとらえているがそこが一番難しいという課題でした。学校ではないのに、児童生徒が休まずコンスタントにやってきたいと思う内容と創意工夫に感心しました。

信州大学附属特別支援学校の報告。A さんをしっかり行動観察。保護者と連携を取りつつサポートサービスから情報をもらう。個別の支援会議・教育相談による話し合いを増やす。主体的に活動できる場面を増やすことがすごく効果的であったということです。

以上が私のラウンドで学んだ気付きです。人から与えられるのを待つのではなく、私から人の出会いに感謝して今後も切磋琢磨し、学び続けていきたいと強く思った２日間でした。

福井大学教職大学院
秋期説明会

平成29年

10月21日（土）13:00～

13:00からの全体説明のあと、概ね14:00から個別相談となります。

福井大学文京キャンパス
総合研究棟Ⅰ13階　大会議室

募集要項が入手できます！
過去問が閲覧できます！

教職開発専攻

- 授業研究・教職専門性開発コース
- ミドルリーダー養成コース
- 学校改革マネジメントコース

福井大学教職大学院は、平成30年4月の連合教職開発研究科としてのスタートに向け、現在準備を進めています。

平成30年度第1回　学生募集日程

出願期間：11月　6日（月）～11月　9日（木）
試験日　：11月25日（土）
合格発表：12月　5日（火）

☞小学校教員免許取得プログラム

長期インターンシップを活かし、3年間で必要単位を取得すれば、小学校教諭1種免許状が取得できます。
課程を修了すると、小学校1種免許状が専修免許になります。
授業料は、通常の2年分の授業料を3年間で分割納入することになります。

（注）教職大学院では、中学校等の教育職員免許状を取得していることを前提としています。
（条件については、事前にお問い合わせ下さい。）

出願を考えている方、関心のある方は、お気軽に以下へご連絡ください。

福井大学学務部入試課
TEL：0776-27-9927　E-mail：g-nyusi@ad.u-fukui.ac.jp
※氏名・電話番号・所属、志望専攻およびコースをお知らせ下さい。

創造力、実践力。
国立大学法人 福井大学 UNIVERSITY OF FUKUI

今後の Schedule

10/21 Sat　教職大学院秋期説明会
11/6 Mon - 9 Tue　第１回大学院入試出願期間
11/11 Sat　第１回大学院入試ガイダンス
11/4 Sat　１１月合同カンファレンス（A 日程）
11/11 Sat　１１月合同カンファレンス（B 日程）
11/25 Sat　第１回大学院入試

【 編集後記 】いよいよ後期が始まりました。急に肌寒くなり、毎日のように着ていくものを失敗したなと嘆いています。しかし、ここでこの嘆きを後悔と捉えるか、省察と捉えるか、そこを問われているのかもしれません。省察の後には新たな実践が見えてくるはずです。これまでの日々の実践を吟味し、明日は天気予報に左右されず、やや厚手のシャツを着ることにします。そして、暑かったらシャツを捲ります。（綾城）

教職大学院 Newsletter　No.102
2017.10.7　内報版発行
2017.10.20 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507　福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp